

剝舟に就て、著者の研究概報なり。緒言に於て先づ此の遺物の學術上に於ける價值の大なるを云ひ、調査の經過を説き、次に二個の部分より成る船體の構造、形状、大小を記載すると共に船材の樟なること、記組に依るに樟は古代にありては此の種の材料として用ゐたること多きが、そは木質が剝舟を作るに適せるにて、現今樟樹の大なる少なきも畿内にては古く此の樹の多かりしを地名より説明せんとし、般側に現れたる色彩に就ては小川博士及び清水大阪高等工業學校教授の燐酸鐵の附着せるなりとの説に大體賛成せるも、色彩が特に中部にのみ明白なる點に就て多少の疑を存せり。第三章以下に於て著者は造船發達史上より剝舟の形式構造を區別して、單材剝舟、復材縫合剝舟、同釘着剝舟となし、今福の舟は第三者の内の植物を屬混用釘着の式なるを説き、船部に板を置きて水の侵入を防ぎ、中部にて擴張力を作る爲にクロスス、ヒームを用ゐ、舷側に更に板を加へたること、後部には櫂又は打櫂をさし込みたる圓孔ある等を注意し、木剝舟の還元を試み亦釘着に使用したる釘類に木釘と鐵製の平釘、カスガヒ、縫釘、打釘の五種あるを述べたり。而して別に前後二大部の接合面の裝置より、此の舟が河川又は湖沼用なりとの藤倉高等工業教授を説き採り。地理的觀察の項にては埋没の状態と附近の土壤を驗して、發掘の際舟體の下方に存したる草木の葉にミツアフヒに近きもの

あることは地勢と併せ考へ埋没當時此の邊は淡水湖なりしかと記す。かくて是等の結果と、船體の下層より彌生土器の破片を出せる事等より綜合して、剝舟の製作年代を奈良朝前期、或は大和朝廷の末期なり、形状は南方系統のツヤマン型、直線型にして、日本造船史上より見れば倭人型に近く、傳説上の天石楢船を想像せしむるものなりと結論せり。此の剝舟に就いては先に考古學雜誌上(八ノ一、二)に大道弘雄氏の報告あり、發掘の顛末の如きは、れより精密なるも、剝舟其の物の構造の調査に至りては、此の報告を俟つて一層明にせられたる也。たゞ其の結論の項の如き、地理的觀察の項に於ける草木の葉の研究より淡水湖と斷ざる如きは未だ俄に定説と看做すべからざるに似たり。(梅原)

●東京灣の津浪に就きて

大森 房吉

(東京學藝雜誌所載)

津浪は、(一)暴風、(二)海底地震、(三)海中噴火、(四)噴火又は地震の際一時に多量の土石が海中に入る場合等に起る、中にも(一)(二)の原因による津浪は本邦に最多し。而して海中地震に因る津浪は、海水が其固有週期を以て振動し、數分乃至數十分毎に急激に漲落し、長時間を経て鎮靜す。暴風雨に基づくものは、氣壓減少の爲平均潮位面高まり、且強風の爲海水膨起し、又激浪により小波動多く、前者とは海水振動の形式著しく異なれり。

東京灣にては灣口の小さな爲、灣外三四十里の海底には屢地震ありて、伊豆・八丈島等に津浪を起すも、灣内にては(一)の原因による津浪は甚しからず。之に反し(二)の原因による津浪は、寛政三年(一七九一年)八月六日、二十日、九月四日の江戸海岸の大津浪、安政三年八月二十五日(一八五六年九月二十三日)、大正六十年一月一日の津浪の如き皆然り。殊に最後の時には、關東各地に於ける風水害甚しく、千三百餘の生靈を斃り、四萬五千有餘の住家を潰滅流失せしめ、八千二百餘隻の船舶を沈没せしめ、濃尾震災・三陸津浪以後の大災害を興へたるが、暴風に伴うて起りし東京灣の津浪が災害を著しく加重したり。暴風に起因する津浪の場合には、之が満潮殊に大潮のときの潮波と一致するときは海水の漲溢を著しく高からしむ、明治四十四年七月二十六日の東京灣津浪は氣壓の最低時が午前三時にて、午前四時半が朝日大潮の満潮時刻なりき。昨年十月一日には風力の最大なりしは午前三時十分にて、同五時二十一分が満月大潮の満潮なり、而も此二つの場合及寛政・安政等の津浪は何れも秋分の前後にて一年中平均潮位最高の時なり。又暴風が海水を海岸に吹きつけて、海水面の膨起を助くること大なり、昨年の場合には東京の最低氣壓七・四・六耗、二十四時間中の氣壓低下四・一・三耗なり、されば之に由て起る水面の膨起は五五〇(即ち一尺八寸なるべきなり、然るに

灣内小松川の驗潮器にて測定せる所にては満潮による海水の隆起を差引き、海水面の實際の膨起は一六一種即五尺三寸なり、故に其差三尺五寸だけは強風が海水を一方に吹きつけて、海岸に海水の堆積を來したる爲なり、當時風速は一秒時間四十米に達せり。之を要するに、東京灣に起る津浪は、低氣壓による海水面の膨起、強風が海水を海岸に吹き寄せること、之が満潮殊に秋分前後の大潮と同時に起ること等によるものにて、又低氣壓が一時間百秤位の高速度にて前進するを以て中心に海水を吸ひよせ、之が高波をなして低氣壓中心の後を追ひて移動するによりて助けらるること多し云々。

●地形と人文との關係を示せるリツチ氏の研究

山崎 直方 (東洋學藝雜誌所載)

●人文の特質と地貌の輪廻 A、B 生 (地學雜誌所載)

共に近著の米國地理學評論に出でしリツチ氏の論文を紹介したるものなり。之は地形の幼年・壯年・老年期に於て人文の發達が各特殊の形式を取ることを數量的に正確に研究し、之を曲線にて表はしたるものにて、頗る興味ある新研究なり。リツチ氏は例を米國の農村にせりて、道路・家屋・市邑等の發達を考察し、幼年期は高地耕作の行はる、時にて、家屋・農園・道路・市邑等主として高地にあり、谷は狭ければ開却せられ、自然森林のまゝに残さる、會

ま道路あれば谷を陥つる兩高地を連絡するもののみ、かゝる地方には谷にそひて主要道路走ることなし。壯年期には平坦なる高地は漸次面積縮少し、鋭き山背を生じ、谷底にそひて平地發達するを以て、此地方にては各地耕作行はる。壯年末期より谷の傾斜緩漫となり、谷の側面の傾斜地耕作行はるゝに至る云々。(以上下用)

彙

報

●久原氏蒐集圖書の寄託

久原房之助氏は我國に於ける古書珍籍の散佚を憂へ、和田維四郎氏に託して數年來その蒐集に餘念なかりしが、將來その主なる圖書數千點を曾子として特許の文庫を京都に建設するの計畫あり先づ管理者和田氏の名義を以てこれを京都帝國大學附屬圖書館に寄託し來りしかば、同圖書館にては特に係員を定めて之れが整理に従事せしめつゝあり。聞くところによれば、その主なるものは古寫經並に古版本にして、前者は和銅經より平安鎌倉時代のもの凡そ百卷、その他慶長以前の古鈔本古文書頗る多く、後者は百萬塔の陀羅尼經を初めとして各種の版様を網羅し、就中五山版は殆んど全部を蒐集し盡くせりといふを得べし。尙徳川時代に於ける

名家の眞蹟類も多く、又黄表紙千餘種、黒本五百種、赤本卅餘種の蒐集は最も注意すべきものにして、何れの圖書籍にも見る能はざる所ならん。異日整理の後は學者の研究に資すること大なるべく、近時富彙が漸く精神的事業に注目してかゝる企畫をなすを見るは誠に學界の慶事といふべし。

●日向の原史時代遺跡調査

京都文科大學にては數年來冬期に於て宮崎縣史蹟研究所に教官を派遣し、縣と協同の下に同地四郡原古墳の發掘調査を行ひ來れるが、過ぐる冬期休暇にも、濱田教授は極原囑托を從へて同地に出張し、十二月廿八日より約二週間同縣史蹟調査囑托若山甲藏氏の案内にて特に石器・土器を伴出する延岡附近其他七ヶ所の遺跡の發掘を試み、層位學的の調査を遂行して、方今學界の注目を惹きつゝ、ある彌生式土器につき興味ある資料を得たりと云ふ。今其概要を紹介せん、先づ縣の北部、東臼杵郡にては、延岡を中心として其の周圍の遺跡を踏査し、南方村縣、苗圃の遺物散布地と、同村大貫の貝塚とを發掘したりしが、前者は四周小山を繞らせる高臺にして表面に石斧、石庖丁、石鏃、玉類、土器等散布し、殊に石鏃の内には確に金屬器を嵌せる珍奇なるものあり。土器は彌生式系統の赤燒にて、其包含状態は、本來表面に近く存し、地下には殆んど遺物を含まず、大貫貝塚にありては、台地端に長き溝を作